

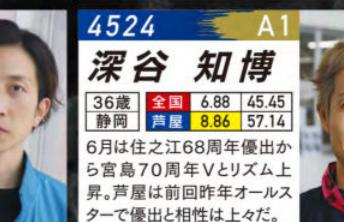
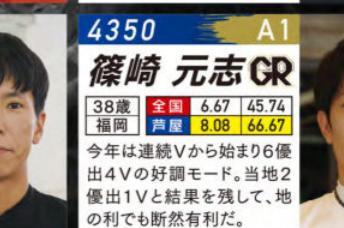
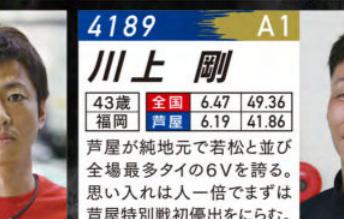
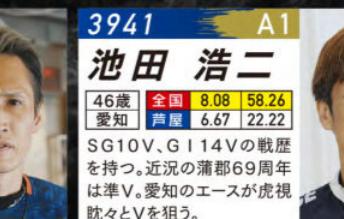
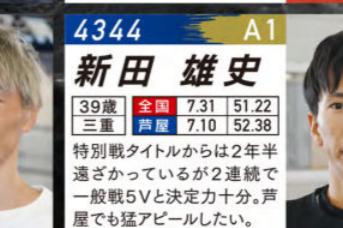
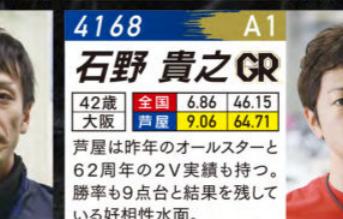
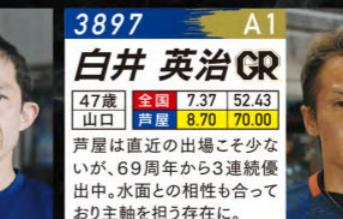
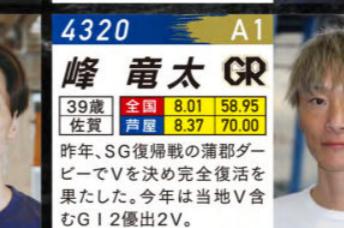
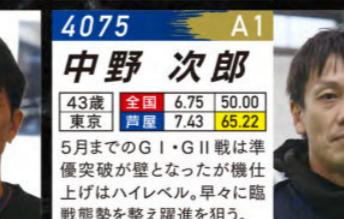
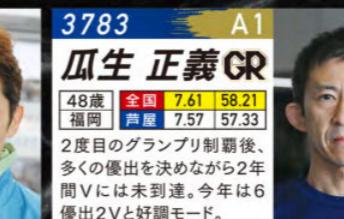
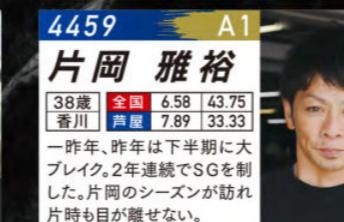
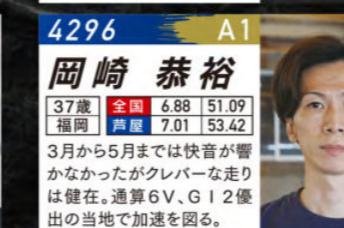
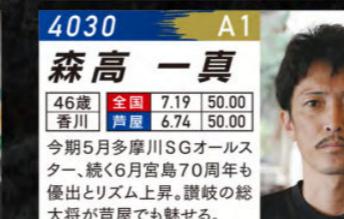
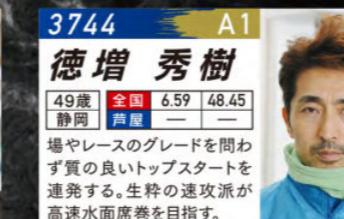
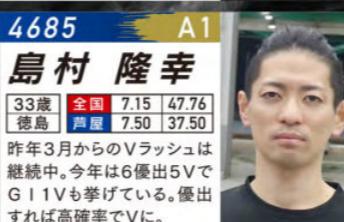
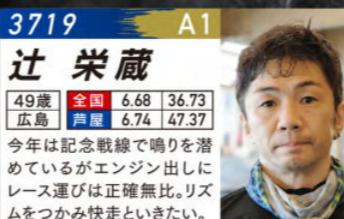
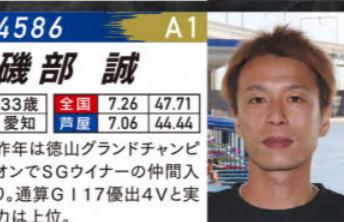
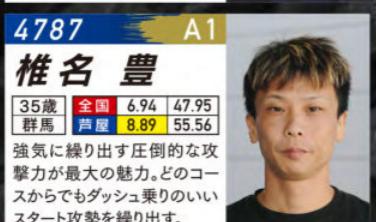
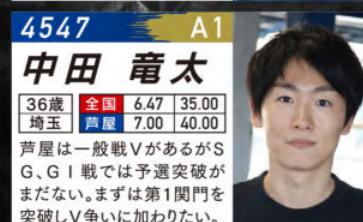
GI

読売新聞社杯 開設72周年記念
全日本王座決定戦

出場予定選手!

8/1 THU 2 FRI 3 SAT 4 SUN 5 MON 6 TUE

出場予定選手:選手名、登録番号、級別、年齢、支部(2024年6月26日現在)※出場選手は変更になる場合があります。選手別データ(左:勝率、右:2連対率、黄色枠:各項目のベスト10)
全国/2024年後期適用勝率(2023年11月1日から2024年4月30日)
芦屋/2022年6月1日~2024年5月31日(過去3年) GR...ゴールデンレーサー



総展望

峰竜太を筆頭にドリーム組がシリーズの中心!

9人のゴールデンレーサーを含むドリーム組がシリーズの中心を担う。その中でも芦屋水面との相性が抜けていい峰竜太を、今大会で優勝候補の筆頭に推す。周年だけで4V、2月九州地区選で6度目の芦屋GⅠ制覇を達成している。直近の芦屋でのSGである昨年のオールスターVの石野貴之も周年覇者にも名を連ねている。馬場貴也にとってはSG初Vを達成したメモリアル水面だ。前回71周年の覇者で大会連覇を狙う茅原悠紀だけでなく、今年のPGⅠマスターズチャンピオン覇者の菊地孝平、クラシック覇者の毒島誠や、松井繁らも歴代覇者としての実績を誇るし、池田浩二と白井英治はGⅡでの優勝歴がある。上位陣はいずれも水面巧者とも言えるだろう。

今年の賞金レースも終盤に向かう。安定勢力をいかんできたが5月オールスターでSG初制覇を達成した定松勇樹だ。23歳での優勝は歴代4位での年少記録であり、これからタイトルを重ねて行くことに疑う余地はない。山口剛や上條暢嵩、関浩哉らも今年のGⅠ覇者としてこのまま賞金の加算を狙うし、磯部誠や片岡雅裕、深谷知博ら昨年のグランプリ戦士もここからベースアップしていくことは間違いない。

地元の大将格は現役最多の芦屋通算16Vの瓜生正義だ。歴代最多に並ぶ17V達成を今大会で目指す。篠崎元志は芦屋の特別戦優勝歴こそないが、SG・GⅠで8回の優出。2月地区選では惜しくも準優勝だった。70周年の優勝戦でFに散った羽野直也は、それだけ芦屋周年のタイトルが欲しいということ。芦屋GⅡV歴のある篠崎仁志と新開航も、もうひとつ上のGⅠタイトル奪取に燃える。70、71周年に地区選と芦屋GⅠ3連続優出中の西山貴浩も、地元GⅠは是非とも手に入れたいタイトルだ。



水面特徴

逃げだけでなく、多彩なレースが魅力の超高速水面!

淡水のプール型水面で、干満差はなく水質は硬め。1Mの対岸側は88メートルと広い上に葦の群生が生えていて、これが天然の消波装置の役割を果たすので返し波の影響は小さい。2Mの広さもそれなりにあるし、ピットから2Mまでの距離も長いので、プール型水面では比較的乗りやすい水面と言えるだろう。その影響は上がりタイムに現れる。モーターのパワーが落ちる夏場ではそれほど目立つタイムは出ないだろうが、スピード勝負が優位になることが多い超高速水面だ。

昨年はイン1着率が64.8%で全24場でトップだったが、昨年は59.2%に下降した。それでも全国的に見れば4位と高い水準は維持しているので、インが強い水面だと想われるがちだし、それは間違ではない。ただし、一般戦の1R~5Rで行われているサンライズレースという1号艇にA級を配するシード番組がこの数字を引き上げているのも確かだ。本来は逃げだけでなく、差しもまくりもくり差しも決まる。多彩なレースが繰り広げられることが魅力のレース場だ。今年の6月9日までに行われた全17開催での優勝戦の決まり手が、逃げ9回、差し3回、まくり2回、まくり差し1回、抜き2回などがそれを証明するひとつの根拠と言えるだろう。

